

巻頭言

「聞こえの回復と音楽会」

理事長 新谷友良

コロナ感染がまた増加し、ロシアのウクライナ侵攻が半年になろうとしています。最高気温が40度を超えるニュースも頻繁になり、心休まらない毎日ですが、皆さま体に気を付けてお過ごしください。

人工内耳の手術を受けて、左は9年、右は7年になります。手術後、3カ月に1回ぐらいの割合で病院に聞こえの検査に通院して、純音の聴力と語音明瞭度の検査を受けます。聴力の回復は実感しますが、語音明瞭度はなかなか改善しません。今でも、単音での正解は40%程度です。

30年以上の聴力検査のベテラン受診者になってしまいましたが、検査ではとまどうことが今でもしばしばあります。純音の聴力検査では、検査音が耳鳴りの音と混ざって、聞こえているかどうか確信が持てないこともあります。はっきり聞こえたところでボタンを押すようにしています。一方、語音明瞭度検査では、確信をもって回答できるものもあれば、しばらく考えて不確かなまま答える場合もあります。とくに拗音の「キャ」や「シャ」などを「ヤ」や「サ」と答えるようなことが多いと感じています。確信が持てなければ、答えない方が聞こえの診断に役立つと思いますが、類似の音を探すことが癖になっています。

聞こえの回復を楽しむために、機会を見つけて文楽や歌舞伎に行くようにしていましたが、現在の語音明瞭度では字幕があってもセリフの聞こえに不全感が残り、コロナ禍での公演中止や入場制限も加わって、最近少し足が遠のいてしまいました。そんな中、昨年のショパンコンクールで日本人二人の入賞が話題になり、生来のミーハー気質から3月、5月、7月とピアノリサイタルに行きました。楽器のなかでは、ピアノの音が一番心地よく聞こえます。聞こえる人の微妙な聞き取りとは比べようがありませんが、何も考えないで音に身を任せると、セリフの聞き取りの緊張感から解放されて、夏の海で仰向きに浮かんで漂っているような安心感が広がってきます。とくに、3月のサントリーホールでの牛田智大のピアノリサイタルは、そのような幸せな時間でした。

このままの聴力で、セリフの聞き取りを何とか良くしようと文楽の台本を読みながらCDを聞いています。秋になれば、文楽や歌舞伎の観劇に再チャレンジする気持ちが起きることを期待している夏の終わりです。